

悼朝雲 并引 (二〇九六年)

紹聖元年十一月、戲作《朝雲》詩。三年七月五日、朝雲病亡於惠州、葬之棲禪寺松林中東南、直大聖塔。予既銘其墓、且和前詩以自解。朝雲始不識字、晚忽學書、粗有楷法。蓋嘗從泗上比丘尼義沖學佛、亦略聞大義、且死、誦《金剛經》四句偈而絕。

紹聖元年十一月、戲に朝雲の詩を作る。三年七月五日、朝雲、病んで惠州に亡す。これを棲禪寺松林中の東南に葬り、大聖塔に直る。予、すでに其の墓に銘し、且つ前詩に和し以って自ら解く。朝雲、はじめ字を識ず、晩に忽ち書を学び、粗ぼ楷法有り。蓋し、かつて泗上の比丘尼義沖に従って仏を学び、亦た略ぼ大義を聞く、且に死せんとするや、金剛經四句の偈を誦して絶ゆ。

【題意】朝雲は蘇東坡の愛妾で、この詩は即ち其の死を悼んで作ったものである。引の意味は：さきに、紹聖元年十一月戯れに朝雲の詩を作ったが、三年七月五日、朝雲は惠州に於いて病死したから、これを棲禪寺の松林中の東南隅に葬り、大聖塔に向き合っている。予、すでにその墓に銘し、且つ前の朝雲の詩に疊韻して、この詩を作り、せめてもの心遣りとした。朝雲ははじめ、文字を見分けなかったが、晩年に忽ち書を学んでほぼ楷書が書けるようになった。そして泗上の比丘尼義沖に従って仏法を学んだとやらで、ほぼ大儀を知っていた。そこで臨終の際には、金剛經の四句の偈を唱えつつ息を引き取った。

《金剛經》四句偈 浮屠是瞻、伽藍是依。如汝宿心、惟佛之歸。

【参考】※朝雲詩并引(二〇九四年十二月)という同韻の律詩がある。

閲覧 [Ctrl キーをおしながらクリック↓](#) [国会図書館](#) [国訳漢文大成](#) [朝雲詩并引](#)

「統国訳漢文大成」文学部、国訳蘇東坡詩集 岩垂憲徳・釈清潭・久保天隋訳注 第三・十四・十五・十六・十七上下 昭和三十五年 東京

蘇軾・上(中国詩人選集第二集五) 小川環樹注

1 苗而不秀豈其天
びょう ひい 苗にして秀でず 豈に其れ天

2 不使童烏與我玄
どうろう げん 童烏をして我が玄を与へしめず

3 駐景恨無千歲藥
とど くら せんさい 景を駐む 恨むらくは千歳の藥なく

4 贈行惟有小乘禪
こう しょうじょうぜん 行を贈る 惟だ小 乘禪あるのみ

5 傷心一念償前債
ぜんさい つぐな 傷心一念 前債を償ひ。

6 彈指三生斷後緣
だんし せい 彈指三生 後緣を断つ

7 歸臥竹根無遠近
が 歸つて竹根に臥して遠近なし

8 夜燈勤禮塔中仙
つと れい 夜灯 勤めて礼す 塔中の仙

【字解】 ○童烏：揚子法言 卷八〈問神〉に「育して苗ならざるものは、吾が家の童烏が九齡にして我が玄を與ふ」とある。玄は即ち揚雄の作った太玄經。これは朝雲の生んだ幹兒の未だ百日ならずして歿（？）せしを指したので、論語の苗にして秀でずの句を取ってこれを況したのである。○彈指：指を一度はじく極めて短い時間。○駐景：月日の景を駐む。時を遷らぬようにして死を免れしめる。○塔中仙：大聖塔を指していう。

【詩意】朝雲の生んだ幹兒が、苗にして秀でず、わずか百日で死んだのは天命ではあるまじく、童烏に太玄經を与えたようにこの幹兒に我が文章を付与せざりしは、まことに遺憾の至り。これに次いで、朝雲も病死し、日月の景を駐めて長生せしむと欲するも、千歳の壽を得せしむべき靈藥なく、臨終の際は小乗の禪ながら、金剛經の偈を唱えた。予は、この不幸に遭い、一念傷心、自ら禁ぜず、これで僅に前生よりの夙債を償ったのは善いとして、三生は彈指の間、後生の縁の断えはてたのは、まことに悲しい。ここに家に帰りし後は、竹根に臥して遠近も見分かず、そして灯火のひらめく方に向かって、大聖塔に礼拝し、せめては彼女の冥福を祈る外はない。